

Civil Information and Education Section 文書について

～ CI & E 文書からみる金沢大学設立のプロセス～



「CIE BULLETIN (2 June 1947-21 December 1949)」
(明星大学出版部)

今回は、これまで大学史であまり取り上げられなかった戦後占領期改革資料の一つ、CI&E(民間情報教育局)文書の中から、特に金沢大学設立時の興味深い資料をいくつかご紹介します。

CI&Eは、戦後占領期の1947年6月から1949年12月まで、日本国内の民間情報・教育関係軍政方針の一定化を図ることを目的として、GHQに設置された一機関です。

このCI&E文書は、Washington National Records Centerにその原本が収納されています。日本では、国立国会図書館の占領文書収集整理の一つとして、すべてマイクロフィッシュ化され、同館憲政資料室において公開されています。

当編纂室の現段階までの調査によると、金沢大学創立に関する文書は、重複しているものも含めて、およそ20枚ほどありました。以下、その中から3枚の抄訳をご紹介します。

まず第1点目の資料は、1948年4月16日にCI&EのW.C.イールズと金沢医科大学附属薬学専門部の鵜飼貞二郎が、会談した際の一節です。

鵜飼氏は、金沢の北陸大学を計画している準備委員会の会議が県知事を議長として、4月15日に開かれたことを報告した。文部省の忠告に従って、委員会は最初の提案から農学部と芸術学部を削除して、医学部、薬学部、法文学部、工学部、教育学部、理学部の6学部を残すことを決定した。

～ CI&E (C) 03627より～

第2点目の資料は、1949年1月14日に金沢高等師範学校校長庄司彦六とイールズが会談した際の一節です。

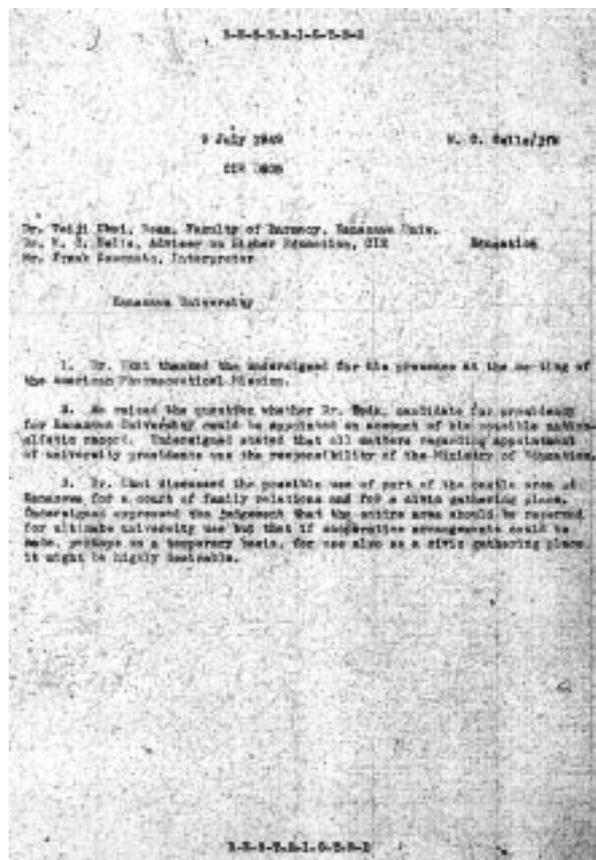
庄司氏は、提案されている総合大学設立のために金沢城内を利用する計画について手短かに説明し、それに関する助言を求めた。イールズは、金沢市内に無駄な建物を造らずに城内に建設する妥当な計画を、長期ではあるが慎重に実行するように指示した。

～ CI&E (C) 03647より～

第3点目の資料は、イールズと金沢大学薬学部長の鵜飼貞二郎が、1949年7月9日に会談した際の一節です。

鵜飼氏は、金沢城内の一部を家族交流のための中庭や市民集会場として使用することについて議論した。イールズは、全区域は基本的に大学に用意されているが、もし暫定的な条件で協定ができるならば、市民の集会場として使用することもとても望ましいのではないかという判断を示した。

～ CI&E (C) 03661より～



「CI&E (C) 03661」

50年史編纂によせて

学寮問題へのかかわりを回顧して



鈴木 寛
(名誉教授)

学寮問題は大学によっては学園紛争の火種ともなった。幸い金沢大学の場合は大きな紛争に至らなかったが、関係者にはたいへん心が疲れる問題であった。私は金沢大学在職中、学寮委員あるいは学生部長として、また学外ではあるが、国大協第4常置委員会の教員委員として、学寮問題にかかわった経験がある。

学内では、いわゆる2.18通達をめぐる寮生への対応、そして会計検査院の指摘に対する措置である。2.18通達とは、昭和39年2月18日付の文部省通達「学寮における経費負担区分について」の略称である。これは学寮の管理運営に要する経費について、大学と寮生との負担区分の基準を定めたものであるが、その中の寮生負担とされた「寮生の炊事のための炊事人の手間代」についてはずいぶん悩まされた。本学を含む29大学に対する昭和54年の会計検査院の指摘は、上記文部省通達の主旨に違背する廉(かど)がある旨の厳しいものであった(当時、私は学生部長であった)。

学外の経験は、国大協第3・4常置委員会合同の学寮問題小委員会における学寮に関する調査研究と報告書の作成であった。その最初の報告書は、国大協総会(昭46)で、学寮問題を抱えていた諸大学から異議が続出し、公表されなかった。第2回の報告書「今後の学寮のあり方」は、総会(昭52)で取扱注意として各大学に渡された。54年の会計検査院の指摘(上述)が出たあとの第3回の報告書「学寮のあり方について」は、学園紛争が下火となったこともあり、総会(昭55)でようやく国大協の統一見解として了承された次第である。

なお、国大協における学寮問題の検討に当たって、私個人としては金沢大学における学寮関係者の取組みや寮生との対話が大いに参考になったことを付記しておきたい。

金大秘宝探検隊

その式 「石川県教育宝くじ」 (石川県立歴史博物館所蔵)

この宝くじは、金沢大学創設準備中、昭和23年の「設置促進週間」の行事の一環として発売されたものです。金沢城内にある建物の改装費の一部をまかなうため、石川県が実施しました。

第一回の5月は、一口30円で、総額1500万円分が、第二回の11月には同じく一口30円で、総額2100万円分が発売され、期間内にほぼ完売したそうです。

ちなみに、第一回の目的は「北陸総合大学建設のため」とありますが、第二回では「金沢大学建設のため」になっていて、この間に「金沢大学」という名称に決定したことが分かります。

注目すべき第一回の賞金は特等30万円、一等10万円、以下五等までであり、賞品は自転車、革靴、綿織物以下多数、「大凡二本に一本の割合で当選致します。」と書かれています。第二回になると特等の賞金は50万円、賞品はミシン、服地、ゴム長靴純綿染ぬき手拭、化粧石けんになり、当時の物価や生活を伺い知ることができます。

他大学の年史等を見ると、愛媛大学、鳥取大学、高知大学なども、新制大学設立期に同様の宝くじを行ったようです。

金沢大学が創設されてからもうすぐ半世紀。金沢大学のこれまでの発展を思うと、当時の宝くじ購入者の方々にも感謝しないといけませんね。



「第一回石川県教育宝くじ」



「第一回石川県教育宝くじ」の裏面



「第二回石川県教育宝くじ」

50年史編纂への取り組み

金沢大学は、新制大学として昭和24（1949）年に創設されてから、平成11（1999）年5月31日に50周年を迎えます。その50周年を迎えるにあたって、現在『金沢大学50年史』の刊行に全学で取り組んでいます。

金沢大学はその前史（第四高等学校、金沢医科大学、附属薬学専門部、金沢高等工業高校、石川師範学校など）の伝統を受け継ぎ、新制大学として発足以来、大学院を中心とした教育・研究の高度化、文系学部の改組拡充、総合移転、教育課程の再編成、教養部改組等の大きな問題に取り組み、北陸の基幹総合大学を目指して、発展と変貌を遂げてきました。このような大学全体の歴史を客観的に捉え、また、全学的課題に対する部局の対応も含め、多面的に考察した大学史の編纂・刊行を目指しています。さらに、現今の多様な社会の要請に応える教育・研究の充実発展を図るとともに、広く地域に開かれた大学として、その自己点検・評価を行う視点で編纂し、21世紀における金沢大学のあるべき将来像の構築に寄与しようとするのも目的の一つです。

『金沢大学50年史』は、『部局史編』と『全体史編』の二部構成を予定しています。

これまでに『部局史編』では、部局史編纂の会議を重ねながら、各部局の年表の作成に取り組み、現在、それをベースに各部局の目次案を作成しています。また、すでに執筆担当者が「50年史執筆要項」をもとに、原稿の執筆に着手している部局もあります。

一方『全体史編』では、『部局史編』の進行状況に合わせながら、現在、目次とその構成案を検討中です。併せてこれまで目に触れなかったような、全体史に必要な内部資料の収集にも努めています。

なお今後も、編纂の進行状況については、逐次このニューズレターの紙上でお知らせする予定です。

50年史編纂室からのお知らせ

< 50年史編纂用資料（大学の年史等）の利用について >

50年史編纂の利用に供するため、金沢大学附属図書館3階の研究者閲覧室に大学史関連資料を別置配架しました。主要国・公・私立大学および北陸3県の大学年史等、319冊を配架しています。閲覧室でゆっくりと閲覧していただけます。また必要な文献については「50年史編纂室」名義でコピーも可能です。閲覧室には、配架資料の目録（『50年史編纂用資料目録』）もありますので、そちらもご利用ください。

< 50年史編纂室所蔵の複写製本（『金沢大学創設資料』『事務通報』等）について >

現在、50年史編纂室では以下の複写製本を作成・所蔵しています。編纂室にて閲覧できますので、ぜひご利用ください。

『金沢大学創設資料』 壱～四巻・別冊

『事務通報』 昭和25年～平成6年

『学生便覧』 昭和25年度～昭和38年度

『金沢大学附属図書館報 こだま』 創刊号～第126号



50年史編纂委員会委員

佐藤 保

(医学部附属病院教授)

50年史余滴

医薬分業のしがらみ

金沢大学50年史の編集委員を拝命したが、平常状態からは、五十年の歴史を編纂するなどという大それた野望が、一個人の心中に生まれる訳はない。いざ鎌倉となれば、全学的熱風に煽られて舞い上がるであろうが、今のところはまだ、尻に火がついていないので、「歴史を創ることは容易いが、歴史を書くことは難しい」との格言の上に居直って胡座をかいている。

ところがこれまで無縁であった歴史的観点からものを見て、目から鱗が落ちる経験をした。医薬分業問題がそれである。現在、病院は処方せんを院外調剤薬局へ出す運動をしているが、当初70%をこえた院外処方率は、時とともに低下する一方で、笛ふけどなかなか医薬分業は定着しそうにない。医療制度の戦後史を紐どいてみると、GHQの指導下に進められた医薬分業は、もの見事に失敗している。国民皆保険を実現した現行制度下でも分業は進まなかった。その原因は医師側の利欲ではなく、技術料を軽視し、薬代中心の診療報酬にした制度上の欠陥と考えていた。

しかし医療史を振り返ってみると、千二百年も前から我が国は中国伝来の薬学、薬草学を消化吸收し、文献、薬種を保存し、江戸時代には漢方医学の最盛期を迎えた。医師はすべて薬師(くすし)を兼ね、薬剤調合は診療の一部であり、医薬修得の必須条件であった。一方医薬分業を原則とする蘭方医学は、輸入されて未だ高々百年余り、我が国大衆の中に医薬分業を受け入れる土壌はいまだ育っていないとする見解がある。歴史の根は深いのである。とすれば地域社会で医師、薬剤師、患者相互に医療をめぐる信頼関係が成立するまでは、医薬分業が定着しないのも当然と言わねばなるまい。50年史の落穂拾いとして書き留めた次第である。

50年史編纂室

日誌抄録

(平成9年7月～平成9年8月)

年月日 ▶

9.7.4
7.11
7.29
7.30
8.2~3
8.6
8.12
8.19

7~8月

内容 ▶

編集会議(第6回)開催
50年史編纂委員会(第8回)開催
大学史関係文献を附属図書館内研究者閲覧室に配架
石川県立歴史博物館の資料調査
谷本室員、第2回夏期教育セミナー(旧制高等学校記念館他主催)に参加
教育学部図書室にて四高関係資料の調査・収集
医学部地下倉庫にて新制大学移行期関係資料の調査・収集
理学部にて高等師範関係資料の調査・収集
附属図書館にて四高関係資料の調査・収集
創設関係資料の調査
評議会議事録の調査

50年史編纂室からのお願い

50年史編纂・ニューズレターに関する情報・ご意見・アドバイスなどがございましたら、お気軽に同編纂室までご連絡ください。また、四高や金大の写真や資料などについての情報もお待ちしております。どうぞよろしくお願いたします。

金沢大学50年史編纂室
(本部棟6階)

920-11 金沢市角間町
076(264)5284・5288
076(234)4013

電子メール(E-mail)=yukari@kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp